

環境教育センター第6回講演会 (M-カフェ 6)

「子どもが動物に出会うとき ～「ふれあい」からはじまる環境教育～」

日時：2013年6月15日(土)

場所：南九州大学 都城キャンパス 学生交流会館

磯部 美良
遠藤 晃
並木 美砂子*
(*帝京科学大学)

ウサギ、ニワトリ、チャボに代表される小動物の飼育は、子どもの情操教育に効果があると評価されており、新しい小学校学習指導要領においても生活科、理科、道徳などの学習内容として取り入れられている。しかし、生き物とふれあえば、それだけで、やさしい心が育つのだろうか。いのちの大切さが実感できるのだろうか。

講師の並木美砂子先生は、千葉県動物公園の“子ども動物園”で、長年、子どもと動物の橋渡しをするお仕事をされてきた。多い日には何百人もの子どもたちが訪れる動物園において、動物とのふれあいは、ややもすると、「かわいい」「癒される」という消費者の感覚にとどまりがちだが、そうではなく、子どもたちには、誰かのために、自分の知恵と力を役立ててもらおう体験をしてほしい。並木先生は、そうした願いを持って、一人ひとりの子どもと動物との出会いに関わってこられた。

今回のMカフェでは、並木先生の教育実践について紹介していただきながら、子どもと動物との出会いづくりに、大人はどのように関わっていけるのかについて、参加者みんなで考える機会となった。

動物と人との距離感

南九州大学 人間発達学部 遠藤 晃

まず環境教育という言葉聞いたときに、どんなことをイメージされますか？

よく学生に聞くんですけど、それからいろんな方に聞くんですけど、環境教育というとやはり自然保護であるとか、環境の保全ということが一番にイメージされる方が多いかと思います。環境教育と聞かれてもなかなか答えにくいということが実情としてあって、それは非常にいろんなものを含んでいて、非常に漠然とした言葉であるということが背景にあるかと思います。

ちょっと歴史的な話を踏まえて説明をしていきたいと思います。

環境教育という言葉が最初に出てきたのは、1940年代です。1940年代に何が問題になってきた

かということ、環境破壊です。そのあと公害が出てくる。みなさん、レイチェル・カーソン「沈黙の春」という名前を聞かれた方が多いと思います。こういう問題をどう解決していくかという中で、環境教育の重要性が取り上げられていきます。日本でも同じようにいろんな公害が問題になってきます。

自然保護であるとか、環境の保全ということで始まっているんですけど、それが世界中に広がってきて、それに世界中で取り組んでいくということを進めていったときに何が起こってくるかというと、先進国がまず環境を破壊したんだけど、今度は発展途上国が開発を始めていったときに、また環境が破壊されている。でも先進国はそれをやめなさいと言うと、先進国と発展途上国の南北対立が起こってくるわけです。だから環境を保全しなさいと言われても、途上国としては環境を破

壊して自分たちも発展する権利があるんだというふう。自然保護というだけでは問題は解決しないという事態が起こってきます。

そこで新たな概念として、要するに両者を同じ土俵に乗せようということで、「持続可能な開発」という言葉が苦肉の策として生み出されていくわけです。開発は否定しない。発展は否定しない。ただし持続可能というのは何かというと、要するに今ある資源を今使い切ってしまったら持続はしていけない。われわれの世代はいいけど、次の世代は生きていけない。だから持続可能というキーワードを入れることによってこの対立を避けて、両者を同じ土俵にまず乗せようという動きが起こっていくわけです。

同じ土俵にのったときにはじめて、環境の破壊というのは単に自然保護だけでは解決しないということが分かるんです。それはもちろん経済であるとか、社会、文化、そんなものも含めた持続可能な社会を形成する人材の継承者の育成が目的となってくる。だから環境教育は環境保全、自然保護ということで始まっていくんですけど、それだけでは問題は一向に解決しないので、もっと広い視野が必要になってきます。

それでユネスコは、これまでの環境問題だけに焦点を当てた環境教育ではなくて、環境、開発、貧困、人口、食糧、ジェンダー、人権、平和、民主主義、いろんな問題が環境教育という中に盛り込まれていることをアピールしていきます。それがESDという考え方につながっていきます。

ESDというのは「持続可能な開発のための教育」。先ほどありましたように、われわれがわれわれの世代で終わるのではなくて次の世代、その次の世代もつながっていくためには、やはり資源の消費というのはだめだ。われわれの生活の仕方考えないといけない。ただしそこにはいろんな問題が関わってくるので、単に、資源を消費しないというだけではだめで、いろんな南北問題であるとか、そんなものも関わってくるんだという世界的な動きになっていきます。

さらに、日本が世界に向けて、2005年からの10年を「持続可能な開発のための教育の10年」というふうに位置付けて、世界的にこれに取り組んで

いきましようということを発信します。2005年ですから、来年で一応10年という区切りがつくんですけど、なかなかこれが進まないという現状もあるということです。

今のように日本も本格的に環境教育に取り組むことを世界に発信しているわけですから、法律的な整備もなされていきます。いわゆる環境教育に関する推進法です。2003年に出されて、それから2010年に改正が行われています。その中で、われわれの大学に何が関係していくかということ、一つの場として学校教育における環境教育の位置付けを非常に重要視していることです。それが法律の中に書かれているわけなんです。

「学校教育における環境教育の充実のための措置」「教職員の研修の内容の充実」とか、具体的に盛り込まれていきます。さらに、教員指導者への環境教育の指導のあり方の検討。具体的な話はないですけど、これについてももっと検討して、積極的に教員養成の中で環境教育のやり方、スキルを身に付ける必要があるということが改正法の中で盛り込まれている。こんな流れがあるわけです。

例えばこれは小学校における環境教育のねらいですけど、一つは環境に対する豊かな感受性というのがあります。ただ、それを感じていてもだめで、それに対する見方、考え方を育成する。さらにそれについてアクションを起こせる、行動できる実践力の育成。これが小学校の教育の中で、学習指導要領の中にも環境教育というのは盛り込まれているということで、学校でこれはやらないといけないというふうになってきているわけなんです。

とくにこういう知識的なことはいいんですけど、考えて行動すること、自ら問題を見つけて問題を解決していく能力、こういうものを環境教育という中でやっていく。そういう意味があります。だから環境問題についてただ知っているということではなくて、それをどう解決していくかということが問われていて、それを教育の中でやっていかなくてははいけない。

こういう流れを踏みまして、きょうで6回目になるM-cafeですけど、これまで、1回目はデン

マークの人に来てもらって、デンマークの教育について話をしていただく。2回目は私と沖縄の小学校の先生が総合学習の中での取り組みの話をしました。3回目は福岡の保育園で、地域を巻き込んで、土、農、食を中心に据えた子どもの生活づくり、という話をしていただきました。4回目はうちの大学のOBで小学校の先生になられた石川先生をお呼びして、学校の教育の中で稲作り、子どもたちに何を育成するかという、こんな話をしていただきました。前はデンマークの教育に学ぶPART2ということで、デンマーク人の先生も来ていただいて、デンマークの教育の実情というものを話していただきました。

今回で6回目になるんですけど、講演会を通して見えてきたものというのは、環境教育をやる場合にこういう「場」が必要であるということ。例えば森の幼稚園という場が必要である。ただし場を与えていただけでは教育にはならないんで、そこでいったい何をするかという教育者のあり方というのが問われていることで、その場の問題と、そこで何をすべきかということで、今回は、子どもが動物に出会うときということで、こういう動物と出会う場を作られる並木先生が、そこでいったいどんな働きかけをしているか。子どもたちと動物とをふれあわせている現場にいらした先生からお話をお聞きしたいと思っています。

それで、「動物と人との距離」という私の話す内容なんですけれど、私はもともとシカの研究をしています。シカの研究をしていく中で、宮崎のえびの高原に、ノカイドウというきれいな天然記念物の植物があるんですけど、これがいま絶滅の危機に瀕している。なぜかという犯人はシカです。えびの高原のシカは昔はあまりいなかったんですけど非常に増えていて、観光客による餌付けが大きな原因となっています。もう十何年前なんですけど、このシカと観光客の関係を研究しました。写真のように道端で人がお菓子をあげてそれにシカが群がる。この人は巡視員なんですけど、巡視員の前でもシカに餌をあげたりということが普通に見られる。

野生の状態のシカとえびの高原のシカとでどれぐらい行動が変わったかということ、ほんとにもう

あたりをきよるきよる見てて人が来たらおねだりしてみたいな、普通では見られない行動が出てくる。かなり行動が変わってきてしまっている。それでどれぐらいの人が餌をやるか見てみると、シカに近づいてきた人の約2割が餌をやっている。当時えびの高原に、1年間に100万人単位のお客さんが来たということですから、一人一人の量は少ないですけど、一頭当たりになるとかなりの量の餌をもらっているということですね。やはりこれは野生動物と人との距離感がどうしてもベットの関係になっているんじゃないかというのが一つの結論です。

じゃあそれをどうやって解決していくかと考えた時に、やはり彼らに教育をしていかなくはいけないだろう。そういうことで人と動物との距離感、これは野生動物、それからペット、家畜、そしてきょうお話に出てくる動物園の動物と人との距離というのはそれぞれ違うと思うんですけど、そういう距離感というものが必要じゃないかというふうに考えます。

みなさんの中にも保育園とか幼稚園とか、そして小学校で飼育動物と子どもたちの関わりということに関わる方もいらっしゃると思います。それぞれの取り組みとというのがあると思いますけれど、きょうは並木先生に動物園で子どもたちと動物とをどうふれあわせるか。そこで並木先生がどんな働きかけをしているかという、そういう具体的なお話をお聞きしたいと思います。00:13:40

子どもが動物に出会うとき

帝京科学大学生命環境学部 並木 美砂子
では改めまして並木です。よろしくお聞きします。

きょうのお話は、いま遠藤先生から受けまして、距離という問題だと思うんですね。距離というのはとっても難しいことで、自分がどういう距離感かということをお覚するというのはちょっと厳しいことかなと思うんですね。そのためにはだれかほかにそれを客観的に見てくれて、一緒に考えていく中で自分の距離というものが分かってくんじゃないかなと思うんです。

きょうの内容

きょうの私の内容としては、動物園という場がどのように仕立てられているのかということ。その中で私はどんな役割をしてきたかということ。具体的にどんな場の創り出しをしてきたか。その時にかかわる職員の研修的なことに何があるのかということ。若干理屈もありますけれども、もうだいぶ以前に、子ども動物園というのが世界で初めてポルトガルにできたんですけども、その後すぐにいろいろな批判が起きましたので、その批判がどういうふうに真摯に受け止められるかというお話を、先ほどの距離感の問題をここでも考えてみようと思います。最後にこれは非常に結論的なことで申し訳ないんですが、場づくり、それから人づくり、これの条件の一つはどんなお話をだれとするかという、それを対話ということ、話し合いということですね。これについて触れて終わろうかなと思います。

この最後の点については、ぜひみなさんと対話的に話し合いをしていけたらなと思います。この流れでいきたいと思います。

ちなみに皆さんは動物園を、好き、嫌い、どちらともいえないでいうと、どのあたりでしょうか。ちょっと聞いてみたいと思います。好き、嫌い、どちらともいえない。はい。了解しました。

動物園という「場」について

いろんな人がいると思いますが、おおかたは好きだということなので、安心もするような、距離感ということでは大丈夫かなと思いますけれども。

みなさん、動物の名前、知ってますか。左側、右側。モルモットとマレーバクといますね。かわいいなと思ってくださる方も多いと思うんですね。このバクって珍しいなと思うと思うんですが、じつはこの「かわいい」とか「珍しい」というのは、まったく「人間」基準というかね。人間にかわいがられるために生まれてきたわけでもないし、珍しがられるためにいるわけでもないんです。みんな人間基準でそういう言葉が使われているんです。

野生動物保全施設としての動物園 17：20

少し硬い話になりますけれども、先ほど遠藤先生が40年代に環境問題に関する鋭い、いろんな見

方、批判というのがあり、レイチェル・カーソンの名前が出てきましたが、まさに第二次大戦を経て、やっぱり環境に配慮しなきゃ、自然保護という言葉が出てきました。様々な国際条約や、国内の法律というものも整備されてきています。動物園もその中で、まさに動物を消費していた施設から、保全のための施設に、60年代後半に自覚的に変わってきました。もちろん消費というのはどうということかという、アフリカに行って根こそぎカモシカ類を持ってくるとか、そういうことをしていたのに、反省をして動物園で増えたものを動物園どうして交換してうまくやっていくということです。逆に絶滅の危機に瀕した動物たちを世の中に返してあげる。その生息地に返していく。そういう理想を掲げて、保全施設として歩み始めています。

世界には、1300の施設と、7億人の年間の利用者がいます。水族館を含めるとですが。日本にはあわせて160の施設があって、7000万人。7億と7000万人。世界の1割の利用者が日本だということになります。そのぐらい日本人は動物園を訪れているということですね。そういう動物園、大きな目で見ていただければと思います。

自己紹介

私の簡単な自己紹介をしますと、動物園との出会いというのは、博物館の学芸員になるための資格を取得するための実習というのがあって、それである動物園に行きまして、学芸員実習を行った時に、盲学校の生徒さんのプログラムの補佐をいたしました。その時に、もう考えられないくらい触角と聴覚が非常に鋭いということ、一人ひとりが全く違う反応をすること、それに驚いて、盲児という一括りで見てはいけない。すごく一人ひとりを大事にしくちゃいけないということ学びました。

そういう一人ひとりを大事にする学習のためのプログラムというのは、動物園ではどういうふうに行けるんだらうというのが出発点です。そして教育心理学というものを学ぼうと思いました。それまでは動物が好きだというだけで大学の門をたたいて、遠藤先生と同じというか、シカ、サルなどの野生の動物たちの調査などをする体験をして

いましたが、この動物園との出会いによって、非常に可能性に満ちた世界であるということ、もっと動物のことだけじゃなくて、子どものことも知りたい、ということです。

この中には保育や、いろいろな先生になる学習をしていらっしゃる方もいると思いますが、ブルーナーとかヴィゴツキーとかワーチとか聞いたことがありますでしょうか。こんな人たちの理論を習わせていただきました。とくに当時は認知心理学というのが非常に台頭してきていて、対話の重要性とか最近接の発達領域をどう容易するか、みたいな非常に学問的にも高揚感のあるそういう教育心理学との出会いがありました。

結論としては、これからお話しする場づくりにおいて、一人ひとりとの対話を重視した環境教育というのが動物園でできそうな気がしたということです。そういう理屈もあります。

千葉市動物公園の日常のふれあいコーナー

ここからは具体的なプログラムの内容に移りたいと思います。

3月までいた千葉市動物公園に、日常的にふれあいができる場所があるんですが、そのテーマが「コミュニケーション」です。「いっしょにおはなししようよ」というタイトルの大きなホワイトボードがあって、そこにきょう登場する動物たちの名前とか、こんな動物が何時ごろ来ますよ、みたいな、そういう情報コーナーがあるところであふれあいの活動が展開します。

動物を介した会話

先ほど対話を重視したといいましたよね。どんな対話がだれとの間で起きているのか、ということなんですけれども。当然動物を間において、大人と子どもと、それから私どものような飼育職員、動物と子どもの間を取り持つ、そういう要は動物園側の人間と、子どもと大人の対話がどんどん進むわけですね。

こんなふうになにこにことお母さんがちっちゃな赤ちゃんに「見てごらん」と言ってる場面が彷彿とします。しっかり顔が写ってるお子さんは、なんか自分が次にこの動物をちゃんとかごに戻して隣のお友達と今度は交換しようかと思ってるのかもしれない。すごくはっきりとし

たい表情をしています。無言であっても対話は生じています。内現とって、その人それぞれの中で自分に語りかける言葉というのをもちますので、対話というのは音声としておしゃべりをする以外の、自分の中での自分との言葉のやり取り、そういうものがありますし、にこっとしたり、何かしっかりした表情をしたときは、まわりの大人はそれを見て感じ取るものがあります。これも対話になります。コミュニケーションの基本はそういう視覚的な情報と、中で起きる言葉の連動、こういうものが対話の中に入ってくると思います。

コミュニケーションの成立には、子どもからの発話をよく聴くことが大事

まずコミュニケーションの成立をどういうふうに考えるかという、聴くことですね。お子さんはよくまわりの大人の反応を確かめて、これでいいの。これは言葉で「これでいい」と言うときもあれば、見上げて「これでいいの」と目で訴えるときもあります。まわりの大人の反応を確かめて、いいのか、悪いのか。そういうふうにしてますね。自分がやっていることを自覚しようとしています。

それからこんなような言葉も出てきます。これは音声として。「見て、見て」というふうになまわりの大人に注意を呼びかけます。自分を見てほしい。あるいは自分が関わっている動物を見てほしい。「おひげがプルプルしてるね」「このお耳は、桜の花びらみたいだね」。こんなふうなんです、すごく素直に、その状況を何かになぞらえたり、感じたままを率直に話すのが子どもの特徴です。大人は感じていてもそれを音声に出して伝えるということは少ないです。むしろ子どもの反応を喜ぶという形で関わります。

私たちが気を付けていることは、よく聴くこと。よく表情を見ることです。

個別の「問いかけ」をすることが大事

それから個別には問いかけをよくします。餌をあげてもらったら、その動物が「どんなふう食べているか、教えてね」と言います。どんなふう食べているかな、だけじゃなくて、「教えて」というふうな、私に教えてねと。「べろはあるのかな」。問いかけですね。そして言葉でできるだ

け表現してもらるように促します。

みんながご飯を食べるとき、その動物がご飯を食べるときは何か違うのかな。自分の体と比べてもらうことも促します。小さなハツカネズミなどは親指を見つけるのはすごく難しいので、逆に「親指あると思うんだけど、どこかな」と探してもらいます。少し年長の子どもになると、何をしてほしいと思ってるか、その動物がですね、「何をしてほしいと思ってるのかな」と想像してもらいます。とにかく問いかけをすることによって、直接言葉で表現してもらい、あるいは言葉にならなくても私たちがシグナルを受け止めるようにする、ということになります。

予約制でふれあい教室 27：00

動物園では大きなところで、予約制の学校とか保育園とか、ふれあい教室の実践があります。ふれあい教室という名前のところもあれば、コンタクトコーナーというふうと呼ぶところもあれば、団体指導なんて硬い名前を付けているところもありますが、・・・モルモットとかウサギとか小さな動物を介したふれあいの教室になっています。

いまちょうどこれは始まったところですね。どんな動物がこれから登場するかなという紹介をしています。小学校の1年生です。

事前 団体引率者との打ち合わせが鍵

私たちが重視してきたのが、引率である先生方との打ち合わせです。流れを説明するだけではなくて、出会いを一緒につくっていくために、どんなふうなことに気を付けてほしいとか、先生方に期待することなどをていねいにお知らせいたします。またどんな動物がどのように登場するかということも体験してもらいます。これが分かれば目だと思っています。一緒に先生たちに見通しをもって楽しんでもらって、子どもの気持ちに沿ってもらえるか、それともその流れに沿って、ただ体験すればいい。いろんな出来事、起きているはずの出来事を見過ごされてしまうこともあります。そんな大事な大事な一瞬を大切に思ってもらうためには、かなりの時間を割いて先生と一緒に体験をするという、つまり子どもの気持ちになってもらう時間を作っています。

一番手前にいるのが職員です。3人が引率予定の先生方です。ここでももちろん対話が生じるわけです。

当日 ① どういう動物か、なぜその行動をするのかの説明

当日になりますと、小学生ですと行動の意味というものも教えます。紹介という形で教えます。なぜ爪が鋭くできているかというのを予想してもらったりですね。難しい言葉でいうと行動予測というものがありますが、そういうことをしてもらいます。

② みんなの手が遊び場になるんだよ

それからもうちょっとひと工夫するわけですが、遊ぼうじゃなくて、「みんなの手がこれから動物の遊び場になります」という言い方をします。動物のために遊んでもらえるんだという感触ですね。遊ぼうじゃなくて。これはよく考えてみますとすごく大事なことで、一瞬でその動物の側にたてるわけです。自分が楽しく遊ぶじゃないんです。動物が私たちの膝や手の上で楽しく遊んでもらうにはどうするかという話なので、結果、子どもは遊ぶこともあるんですよ。でも誘いかけの最初としては、自分の欲求ではなく、動物の要求に応えるためのあなたたちの体ということをつかってもらうようになるべくしていきます。

③ 何が起きている？ 何が起きそう？

それから問いかけとしてはこんなこともよくします。一緒に座って、「何が起きているの」「何がこれから起きそう」。先ほどの行動予測と、分かる人は、これからずーっと手から肩まで登りそうとか、自分の手のおいをかいてくれると思うとか、少し先を予測してもらいます。「かわいいね」じゃないんですね。この動物がどう感じているかを表現してもらいということに時間を割きます。もちろん外から見ると遊んでいるように見えるんですね。子どもたちは触るとききゃあきゃあ言います。だから外から見ると遊んでいるという感じに見えるかと思いますが、私たちとしてはこういう問いかけによって一人ひとりに働きかけることに注意しています。31：37

係員が「話のたね」として持っていること（ハツカネズミ）「進化」「系統」（比較分類）で考え

る

ただ話のたねとしては、ここからは職員の研修的なことになってしまいますが、裏側の話としてなんですが、予測させるにしても、問いかけをするにしても、紋切り状にそういう言葉を連ねればいいのではなくて、科学的な、動物についての理解をしていないと、問いかけはしにくいわけです。そうでないと予測したことが起きているのか、たまたま起きていることなのか区別がつかないので、子どもたちへの問いかけや励ましにニュアンスの違いが出てくると思うので、その動物がどういう動物かということについてはしっかり研修をしているわけです。

小さいお子さんにはちょっと難しい言葉ですけど、動物をやっている方はこの言葉はすんなり入ると思います。比較分類。進化と系統ですね。

どういう祖先種のもとにこの齧歯類(げっしるい)が生まれてきたのか。その齧歯類の中でも、リスと違ってネズミの仲間はどういうものか。体の仕組みはどうかということの動物学的な知識ですね。これをしっかりと学ぶわけです。尾の問題。両前足を使った採餌、えさを食べる時に前足を使うかどうかというのは、系統的に見ると非常に分かれるところなので、そういう科学的な知識を学ぶんですね。種子食である。小さなものでカロリーを取れるように作られている。そんなようなものですね。

最後のセルフグルーミングというのは、自分で自分の体を毛づくろいする。これが社会性がある動物はお互いにしあいます。そうでない動物は自分で自分の体をなめます。みなさん、ネコがほかのネコに近づいていってなめてあげるといっているのは、親子の間以外にないのをご存じかと思えます。でも社会性がある動物は、例えばモルモットのようにお互いにグルーミングしあったり、サルのようにグルーミングしあったりする仲間もいるわけです。このセルフグルーミングだけなのかどうかという部分が、どういう暮らしをする動物かの、一つの分かれ道になるわけです。ちょっと難しかったかと思いますが。

モルモットはどのような動物か

ただモルモットは非常に珍しい生き物で、擬反芻(ぎはんすう)、嘔み戻しに近い行動をします。これは有蹄類といって、シカの仲間やウシの仲間がする反芻、嘔み戻しですね、それに近いことをやる動物で、珍しいので、ふれあいの時もそれに近いことが観察できることがあります。でもこれを知ってなかったらたぶん話題の中に入らないので、なんかよだれを出した、で終わっちゃうと思うんですね。でもそういう場面に遭遇した時に、これを知っていれば次の話題につながるわけです。こんな、モルモットはどんな動物かということも、いろんな本とか実際に見て観察をして研修を積みます。

例えばキュウキュウキュウキュウなくんですけど、それには一つ一つ音声コミュニケーションの意味があります。群れで普通に暮らす動物です。子育てはオスもメスも、おじさんもおばさんもみんな寄ってたかって子育てする動物なんですね。ということも知っているのと知らないのでは全然違います。天敵から逃れるためにものかげにいて、じーっと我慢していることができる動物です。動かないでいることができます。このようにたった一種類の動物でも、よく科学的に調べたり観察をし続けると、たくさん話のたねというのは私たちの中に育つわけです。これが瞬時瞬時に、お子さんとの対話の中で話を引き出すときに、次の観察をさせていくときの動機づけに非常になります。

モルモットの行動特性の紹介

こちらは時々行う、集団でどんな行動をするかというのを見てもらいます。社会性が豊かな動物の、ある鈴の音を聞かせると1匹がさーっと出てくるんですね。追従型で群れで暮らす動物ですから、バーッと出てくるんですね。そんなような行動特性を見てもらって先ほどの、社会性に富む、接触を好みながら追従型、だれかリーダーがいるとそれに沿って追従するタイプであるということも実際に見てもらおうわけですね。

子どもの年齢によって工夫していること

では今度はお子さんの年齢によって、どんな出会いの工夫をしているかというお話を少ししたいと思います。赤い文字で書いてあるところは、保

育を勉強している人とかはよく聞くことかなと思います。デューイという人は、小学校の先生になる人はよく聞くとおもいます。

2歳ぐらいになると、マニピュレーションという手指の感覚が急速に育つ時期ですね。お箸が持てるようになってくるとか。そういう時というのは徐々に自分の運動神経で自分の手指の力加減というのが統制できるようになりますから、逆に小さい動物というのが非常に役立ちます。一緒に見ながら話しかけながら手指の感覚というものを動物の動きに合わせて感じてもらう。

3歳になると、かなりの発話ができるようになりますから、経験の統合、つまり過去に経験したこと、ついさっき見たこと、目の前で展開はしていないけれどもそれを思い出してもらって、いま目の前にあることとつなげる。そういう働きかけ。それはお話を聞いてあげる、ちょっと質問をするということまでできてくることです。

4、5歳になってくると、まず動物をよく見るということ、よく見ましようでは全然だめなので、どこかケガはしていないかなとか、体のどこか硬いところはないかなとか、具体的にその動物を観察する視点というものをこちらから提示します。それから、見ていておもしろいことは何か、どうしてそう思うかということも、言葉に出してもらおうようになるべく働きかけをします。これが聴くということになるわけです。

それから別な見方の提示というのは何かということなんですけど、これはまたちょっと別な研究なんですけれども、だいたい3歳ぐらいの時は、子どもが何かを言うと、それを大人、多くは保護者ですが、「そうだね」とうなずいたり、なるほどと聞き流しますが、4歳ぐらいになってくると、「え、ほんと？」とか、「違うんじゃないの」「そんなことしていいの」というふうに少し視点を変えさせる働きかけをよく対話の中でするんですね。子どものほうも分かっているからわざと、反対の反応を得るために働きかける。ちょっとつづいてみるわけです。それはまわりの反応を確かめるためです。なので、いけないことでもダメと言うだけでなく、私にはそれはこういう理由でよくないと思うという理由をちゃんと添えて、しっ

かりと話してあげるということができると、4歳ぐらいでしょうか。わざと反対のことをして見せる。それを利用して別な見方、まっとうな関わり方で、自分はそれはよくないと思うと言うと、しっかり向き合うことになると思います。これは発達が先か、教育が先かということになると難しいと思うんですが、両方が同時に起きていると思います。

小学生になると、何かをしてあげるということの楽しさが分かるので、そのメニューを用意する。餌の準備をしてあげる。次の人のために場所をきれいにしてあげる。ブラッシングをしてあげる。そんなようなこと、きれいにするとケアですね。動物のケアの一端を担ってもらおうような働きかけをする。こんな工夫をしていきます。

でもこれは教科書があるわけじゃないんですよ。係員どうしていろいろ反省会をしたり、年齢に応じてどうしたらいいかという話の中で、だんだん紡ぎ出されてきた結果としての工夫の・・・です。成長段階における分類というようなことだと思います。

この最後の、ブラッシングをしたりとか次の人のために予測して何かしといてあげようとかいうのは、自分がだれかのために役立つという確実な報酬感というか、自分で自分を褒められる体験をする、じつにいい瞬間だなというふうに思います。

「子ども」を社会的関係の中で理解するために (係員の研修内容例)

係員の中ではその対話も含めて、様々な人々の中でふれあいの場というものを作るわけですから、こんなような研修も重ねています。

子ども時代というのは近代になって初めて存在が分かったことなんです。頭の中に知的な構造が、年齢によって変化する。それから相互関係の中に子どもは育つというような。こういう発達心理学というような内容も研修の中に入れこんでいます。子どもと大人で関わることによって、大人は価値のあることを伝えようとするし、それはいけないんじゃないの、こうした方がいいんじゃないの、それはこういう理由だからということや伝えようとする。その伝えようとする活動の中で大

人も学ぶわけですね。子どもがいなかったらたぶんそういう学びはないと思います。子どもに語って聞かせることによって、「うん、なるほどそうだな。そうに違いない」という感じですかね。

43:30

事前申込制による個人参加の「クラブ」では… 動物(ヤギ)をよく「観る」体験プログラム

あとはですね、少し肩の力を抜いて見てもらいたいんですけども。個人参加で参加するプログラムというのが別にあるんですね。いままでのことは日常活動の中ですが、こんな可能性のあることも少し見てもらおうと思います。

「私のヤギじまん」というテーマで、事前募集で、「やりまーす」と手をあげてもらったんですね。動物を、これはヤギなんですけど、「観る」プログラム。「よく観ましょう」だけではだめですから、こんなツールを用意します。

観察ツールとしてのシート例(5枚)

5枚のシートを使って、自分のヤギを決めて、そのヤギがいかに魅力的かというのを、がんばって探します。そのための記入シートです。草をもらう前ともらうあとでどうしたかとかですね。ここには私たちがヤギさんのことについて知ってほしい内容を散りばめている。だからツールなんですけれどもね。

からだの「特徴」を書いてね

体の特徴もちょっと書き込んでもらいます。

思い出して、チェックしてみよう

これが結構、受けがいいシートだったんですが、思い出しチェックシートといって、なかなか全部チェックしながらまわるというのは厳しいので、みんなで集まってヤギの自慢大会をする時に、ところで、ツノでコツンとつつきあったかなとか、お乳を飲んだところを見たかなみたいなことをチェックをします。これをすると思ひ出す子もいるし、もう一回見て見なきゃという子もいるので、おもしろいことが起こります。自慢大会の最後の・・・ですね。

「ぼくのヤギ」の追跡

で、1時間、全体でかかります。

こんなふうに自分のヤギというのを決めて、観察をスタートしていきます。

飼育小屋の見学：どんな工夫がされているのか・・・

小屋の見学にもちょっと行きます。自分のヤギが小屋の中に入っていけば一緒に入って、どんなところにどんな工夫があるかというのを、係員さんと一緒に見て歩きます。

一般のお客さんも少しお世話

これはそのプログラムではないんですけども、一緒の時間に一般のお客さんもこんなようなお世話体験ができるので、自分の追跡しているヤギが行けば、こういった一般のお客さんの行動にも注目するわけです。46:30

動物園で「出会い」を創り出す2つの視点・・・

では、だんだんまともに入れていきたいと思ひます。

動物園で出会いをつくりだす、今までの対話のこととか、年齢のこととか、職員研修の内容とか、思ひっきりヤギ自慢で個体の魅力というものをつかむというプログラムの話をしました。

お手元に、プリントの2ページ目だと思いますが、ヘディガーという人が書きたくくりの部分、その内容と全く同じことなんです。ちょっとゆっくり読んでみようかなと思います。割愛しながらですけども。

これを書いたのは、本は1983年に出ていますが、実際に書いたのは50年代です。ヘディガーという人はスイスのバーゼルとチューリッヒの動物園長をやった人で、その当時流行っていた子ども動物園のやり方に非常に興味をもって、もっとこうした方がいいということを当時から言っていた人です。

かいつまんでいきますと、真ん中辺にありますよね。

子どもたちには、動物への愛とは動物が嫌うことを押し付けるのではなく、動物の性質を知り、要求に応えることにあるのを教えるべきである。これ、このまま読むと当然であると思ひますけれども、実際動物園で行われている多くのことは、パックに入った1杯100円の餌を、あげたいからあげる。先ほどの遠藤先生の紹介にあった、野生のシカに丸ごと袋ごとスナック菓子をあげる、それに近いと思ひます。あげたいからあげる。近

寄ってきてくれるからあげる。これってどうなの、ということはずでに何十年も前から言われていることですね。

動物の要求に応えるというのは、食べたがるからあげるということではなくて、本来その動物が持っている力を伸ばすんだとか、それを敬うには、ということを行っているわけです。人間中心でなくなることを重視しています。

ヘディガーさんは子どもに何を教えるべきか。本来の動物の姿というのは、人間中心的なかわいがり方ではないことを教えるべきだと言っているんですが、それはやはり対話という形で、地味ですけども、問題を感じているだれかが、問題に感じている行動に際して、そうではないんじゃないのという、違う価値観をていねいに提示していくことでしか始まりません。

そこでやっぱり教育論からの引用ですけども、ブルーナーという人が、「教育とは協議である」と言っています。ある、こうではないかという意義、社会的な価値観というのか、そういうものを一人ひとりの心の中に入れ込むというよりは、自主的に意味づくりを行ってもらうための行為。そうではないのではないのか。それはいい。いや、こういう立場の意見もある。というのを、地味ですけども、出し合うことでしか、それぞれの人の中に意味づくりは行われぬ。それはある意味時間もかかりますけれども、やってはいけないことはなぜか。やってはいけない理由のその裏側に潜む自分の動物観、自分の人間観というものをやはりさらけ出すことでしか、本当の意味の対話は生まれぬ。それは教育の基本だということですね。

このあたりは非常に難しいんですけども、ヴィゴツキーという人も同じようなことを言っていて、何かその人の中に少し先、少し先の未来に起きそうなことを見通して助けを出すということを行っています。その具体的な形としては、対話であり、いろいろなツールを介在させたりしても、そういう対話的に働きかけるしかおきないということですね。51：57

子ども動物園運営の考え方

少し難しくなっていました。

ここは先ほどの所と全く同じなのでちょっと飛ばします。

続き・・・

ぜひ、もう古本でしかないんですけども、この「文明に囚われた動物たち」をお読みいただくと、どんな悩みの中でヘディガーが、動物園でのふれあいについて考えていたかということが分かります。

私の好きな部分は、最後にあるんですが、「生物学的状況への最大限の配慮」。これ、訳すところということだと思っんですが。私なりに解釈すると、地球の歴史とともにある、人類よりもっともっと古くからこの地球に現れた生き物たちに生かされている人間たちというか、そういう心構え、気持ちというものを感じ取ったうえでの配慮。自分たち人間があまりにも多くの力を持ちすぎて、まさに野生動物と共存していくうえでは人間側が自分の欲求を抑えなくてはいけない。欲求を抑えてこそ初めて実現できる共存の道というのがあると思っんですね。最大限の配慮というのはそこだと思います。一言でいうと、人間中心的欲求をやめさせる。これが共存とか、野生動物とうまくやるとかということにつながっていくので、あながちふれあいコーナーでの様々なプログラムも捨てたものじゃないなあと思います。

ちょっと待つ。少し先を予測する。自分の影響力を考える。これは子どもでも十分できることなので、それを言葉や態度で大人が示していく。これは動物園でも十分可能だし、もしかすると学校の飼育動物、あるいは家庭でのペットを本当の意味でかわいがるとはどういうことかということにもつながり、将来、家庭での愛玩動物飼育というのが変わっていく可能性があるように私は思います。54：40

展示動物を介した対話の2つの側面

最後に、これは私たちがみなさんに問いかけなんですけれども、普通私たちは展示動物を介しておしゃべりをするときに、一つは生物学的な、これは動物ですということをお話しします。ここだとトラですけども、左側が係員だと思ってください。動物のほうを向いている人がみなさん、お客さんだと思ってください。この動物についてお

話をする時は同時に、自分をその動物がいる世界、あるいは自分がその動物をどう見ているかということも同時に話しています。その結果感動を得るかどうかというのは、聞くほう、お客さんのほうもどういうスタンスでそれを聞くかによると思うんですね。この人は何でそういうことを話しているんだろうという耳を持つと、その人が誘いたい世界に踏み込むことができます。逆もあるわけです。お客さんというの一人ひとり異なるので、違う世界観を持っているので、この人と話すと、この人の持っている動物観に入り込むことができるわけですね。ですから1対1とか、1対1家族であれば、十分にその逆も生まれるわけです。まるでその動物について語りながら、お互いの世界観を交換している場面というがたくさん生まれていますし、それが理想的な動物の紹介の仕方であり、利用の仕方じゃないかなと思います。

一応・・・話題提供はおしまい

実は動物どうしにも対話的な関係があるかも、です。最後は想像の域を超えませんが。

初めてアヒルのひなが、まだ黄色い羽根ですよ。出てきてヤギを出会ったとき。これ、このあと何が起きるかな一みたいな、その対話をちょっと覗き見てください。こんな映像で終わらせていただいてよろしいでしょうか。57:20

磯部：ありがとうございます。並木先生からお話をいただきました。動物園の飼育係として、子どもと動物の出会いの場を作る。その時にいかに飼育係として子どもに対して、子ども一人ひとりに、教育心理学、認知心理学の理論とか、発達であるとか、こんなに神経を集中させて問いかけている。その部分がお分かりになったと思います。そうした大人との会話の力を借りて、子どもたちは目の前にいる生き物たちの暮らしを尊重する。大切にできるようになっていく。謙虚になっていくというんでしょうかね。そんな気持ちを育てていきたいというところをお話しくださったのかと思います。58:30

〈質疑応答〉

磯部：せっかくですので、並木先生のほうに質問でありますとか、それぞれみなさん現場におられるかと思いますが。その中でぜひ並木先生からお話

を聞いておきたいなとか、こんなことを思っているということ、発言しておきたいなというようなことがあれば、ぜひお願いしたいと思います。質問というと難しくなりますね。こういう場合どうしましょう。

並木：そうですね。ヘディガーさんて、園長さんをやった人ですけども、ヘディガーさんの小さい時とか若い時とかどうだったのかなあって思う人いたら聞いてみて。ヘディガーさんのこと、ちょっと知りたくないですか。あるいはおうちで飼っている、学校で飼っている動物のことでどうしたらいいか迷っていることとか、そんな感じのことでも。1:00:20

質問者1：私は市内で保育園をしている者です。以前、猫と犬がいたんですけど、その死を通して子どもたちに教育ができないかなというのがあったんですけども、その時に猫が嫌いだという保護者の方がいらして、猫は菌をいっぱい持つてからすぐ処分してくださいということ言われて、獣医さんに相談して、そんなことないですよと説明していただいた経緯があるんです。昔は猫とか犬が身近にいましたよね。さっき先生の話の中で、動物に対して「かわいいね」とかいう気持ちでというのがありましたよね。子どもはそういうものだと思うんですね。お人形に対しても、お友達というより、よしよしとか、おんぶしてあげようとか、自分の気持ちでかわいがる。でも犬なんかは首を傾げたりしますよね。猫や犬とかの小動物は子どもの教育にとってもいいんですよ。その話が出てこなかったのはちょっと残念でしたけど。さっき出てきた動物は個人では簡単に飼えないし、そういう猫や犬とのふれあいは幼稚園などではちょうどいいですよ。でも自分の年齢を考えると、職員に責任を持たせるわけにいかないから、次に飼うことを躊躇しているんです。もしさっきのような意見があった時に、対応というか、どういうふうに説明したらいいか教えてください。そういう小動物がいつもいる園だといいなと私も思っているんですよ。

並木：やっぱりいろんな病気も含めて、それは誤解ですとってあっさり切るといのは難しいかなと思います。そういう不安を抱えている方がい

た場合は、その不安の理由をきちんと聞いて、それを一つずつ、安心していけるように話を聞いてあげる。この人は動物嫌いだからと切り捨てることなく、聞いていくことによって、もしかしたらそこに変化が隠されているかもしれないということ。

もう一つは、何々が嫌いだからこれはやめてください。でも逆にこれが好きだから入れてくださいという人もいるわけなので、そこは保育園が保育環境として、そういう生き物をなぜ導入するかということが職員間で一致していれば、解決はしていくと思うんですね。ていねいに、いやだと思いうことは理由を聞いてあげるとか。

それで、飼育をしていくときは、いま言った犬と猫というのは、人類の歴史から見ると特殊な動物で、動物園で見るとモルモットとかネズミのタイプとは全く違う人生を歩んできた生き物たちなんですね。つまり、とくに犬は一番最初に人間の社会に、自主的に入り込んできた動物なので、犬は非常にいいかなと思いますが、犬の特徴からすると、リーダーに対して自分の位置をもって生活していく生き物なので、園の中のリーダーとなる、ステータスのある人が飼育をして、その人の命令なら聞くという状況になると非常に不安定になって、いろいろ問題が起きてくるわけです。だからその人が自分の犬として保育園なり幼稚園なりに連れてきているという形を取らないと、共同で飼うというのは犬の場合は犬にとってよくないと思います。訪問してもらおうという形です。それがいいかなと思います。やはり向いている動物、向いてない動物、いろいろいると思いますが、モルモットは、4、5年が寿命というか、犬猫よりは早く天国に召されるので、そういう意味で一生涯を見て取れる。例えば2歳で入った子が、もしかしたら卒園の時にはさよならかもしれないという感じなので、一生涯を見て取れるという点では適した動物かなというふうには思いますが。

磯部：生き物それぞれの知識を持っている、持っていないで関わり方って、選び方から違ってくる・・・。

並木：そうですね。ハウトゥーではなくて、動物

が持っている歴史ですね。どういうふうには地球の中で生きてきて、どういう生活をする、どういう病気を持っている動物かという科学的な理解ということがあって、次にハウトゥー。どうやって飼うのか。そういうことだと思います。1：07：20

質問者2：近くで保育園をやっています。いま保育園にツバメが巣を作って、子どもたちがいろいろ観察をしてるんですね。普通だったら、観て、卵を産んで、ひながかえって、飛び立っておしまい。たぶん半年ぐらいでそうなるんですけども、それをどう起承転結とかつけて子どもたちに促しながら、科学的とは言わないにしても、そういう理由づけとかいうか子どもたちにどう促すのがいいか、何かあれば教えていただきたいと思います。
並木：やっぱりお話づくりみたいにしてね、予測をするということは5歳児ぐらいになるとものすごく楽しいと思うんですよ。だから例えば4月になったら、いつごろ親が来るかなと予測をしてみる。予測が当たる、当たらないとか。そういうのを次の年のために記録を渡す。そういう行事があってもいいのかなって。親が見ている間に何回ぐらい行ったり来たりするかなと予測をするとかですね。いっぱい意見を出してもらって、どの意見に賛成が10人とか、そういうような遊びの中で記録をして、予測をし、記録をし、次の年の同じような時期に、こうだったね、ああだったねとか、ほんとに予測が当たったんだねとか、今年は何でこんなに増えたんだろうとか。それはやっぱり5歳児さんぐらいから十分できておもしろいんじゃないかなと思います。

磯部：ありがとうございます。皆さん、たぶんいろいろ観察させてあげたいと思うんですが、ただやみくもに観察してごらんというよりは、何か・・・ということで子どもが楽しみによく観るようになるということですかね。

並木：学生さんはどうですか。きょうは朝からがんばってやってくれて。聞いたら終わりじゃないですからね。聞いたら質問が来るし、答えなきゃいけないし、次に使わなきゃいけないんだよね。厳しいそうですよ。この際、聞いてみようみたいな。みなさんが保育園とか小学校で引率しなきゃいけないといったら、私だったらこんな計画を立

てないなというのがあったらぜひ聞きたいです。ふれあいに限らずね。

磯部：4年生いかがですか。1：10：45

質問者3：宮崎大学の大学院生です。自分も臨時の採用で学校現場にいたことがあって、そこで春の虫を見つけてみようとか、夏の花を見つけてみようとかいう話があったんですけども、実際に気づきを促すときに発問がわからなくてですね、どこが違うかという話をついやってしまうんですけども、子どもたちの気づきを効果的に出す、実際の具体的な発問はどんなものか教えていただければありがたいと思います。

並木：それ、逆に聞いちゃいますけど、発問がないとなぜだめなんですか。気づかないとなぜだめなんですか。

質問者3：やっぱり学校の指導要領なんかをみると、どうしても気づいてほしいと。ワークシートなんかがあって、それを書き込まないと、そして最終的に成績につなげないといけないという話になって、どうしても書く子が成績が良くなったりするので。逆に心の中で思っていることがあるはずという子もいるんです。でもどうしても文字にできない。何でもいいんだよとよく言うんですけど、何も出てこないというのがあってですね。具体的に足の数何本とかいうと、8本。8本と言ったあとが続かないみたいな感じになってしまってます。何か効果的な聞き方があればということなんです。

並木：すみません。いま意地悪な質問をしました。

スケッチをお勧めしたいと思います。スケッチは時間がかかるのでごくゆったりとした中でないとできません。それでスケッチするというのは、スケッチすることが目的というよりは、さっきのヤギの自慢大会じゃないですけど、絵の出来不出来とかじゃなく、どれだけ描いてみて自分のものにできるかとか、だれかに知ってほしいことをどれだけ描けるかとか。文字で書くことが得意な子もいれば、絵で、こことここがこっだけ違うとか、同じ種類の花でも、こことここで見ると全然違うように見えるとか、あるいはグラデュエーションというんでしょうかね。花のつき方も同じ

日に見るとつぼみの段階とちょっと開いてる段階と、その時にがくと花びらの位置関係はどうかというぐらいの感じでいいと思うので、1対1対応の質問ではなく、あるなしとかの質問ではなく、広げるように、その人が自分らしさを発揮できるようなスケッチの仕方とか表現の仕方、それを励ますという感じで。

一番大事なことはやっぱり振りかえることですね。観察してそれきりじゃなくて、いったい自分は何を見てきたのかということをも自覚する時間のほうが10倍ぐらい必要なぐらい大事なことです。・・・見たことを自分のものにするための時間。それは他人の助けも借りなきゃいけないんですけど、発表してみるとか比べてみるとか、なんですけれども。そういうリフレクションの時間、振りかえりの時間がどれだけ取れるかによって、その観察時間をどのくらいにした方がいいというような逆算でやっぱりやっという方がいいかなって思います。それは文科省の言う成績にどう関係するかというのはちょっと私も分からないですけど。すみません。

磯部：学校教育にも話が及んでいるわけですけども、そういった方面で何か。

質問者4：直接学校教育に関わるかどうか話わかりませんが、宮崎県獣医師会の学校飼育動物対策委員をしているんですけども。当県の場合は学校で飼われている動物が激減してしまっていて、いろんな家畜の伝染病とかがあって激減してしまっていて、これまで全国の学校飼育動物研究会のほうでも、継続的な飼育で動物と接するところに大きな意味があるということで、そういった効果ですよという指導というか考え方で来ていたんですけど、どうしても本県の場合は学校に動物がないので、先生ご紹介いただいたようなコンパクトなプログラムの中で学校の教育現場にそれを提供して、子どもたちのふれあいという活動をする機会が増えているようです。

その中で、動物と接してそこから学ぶというその先に、共感性の発達とかそういったものを、思いやりとかそういったものの発達が大事ではないか。目指すところはそこではないだろうかということをよく言われるんですが、その時にどうして

も単に接するだけではなく、本とか読むとよくアタッチメント（愛着）の形成をできるかどうかによって、その教育的な効果がずいぶん変わってくるというか、愛着の形成がなのまま動物とそこにいることはさほど教育的な効果が生まれにくいようなことが書かれているんですが。先生の場合、短時間のプログラムの中で早い段階で愛着の形成をさせて、子どもの気持ちがそこに向くように工夫をされていると思うんですが、何かうまいコツというんでしょうか、方法があったら教えていただけたらと思います。1：17：43

並木：そうですね。アタッチメントをどう見るかということだと思うんですが、たぶん中川先生たちの学校飼育動物を広げていこうというときのアタッチメントは、汚いことも、いわゆる糞尿の始末ですね、そういう汚いことも生き死にも含めて、日常的に接するチャンスを多くすることによるアタッチメントという意味だと思うんですね。それがないと学校飼育動物の教育的な意味がないというのは、ある意味私も納得できるんですが、様々な条件から、いままさにいない状態とかですね、飼うのが難しい状態であれば、先ほどの持ち込みじゃないですけども、だれかがかわいがっている何かを持ってきてもらい、かわいがるためにどういう努力や気をつけているかというお話をしてもらい、ということもあると思うんですね。だから継続しないと生まれにくいことというのはあるとは思いますが、条件が許さないのであれば、そういう自分のかわいがっているもの自慢大会と、そのかわいがるってどういうことかということを広げてもらう。何々ちゃんはなぜそれが好きなんだろうという、そのアタッチメントの理解ということもあっていいかなと思ったりもするんですね。実際に生き物を連れてこれなければ、写真でもいいし、何か出来事の報告でもいいし、そういう形で要するに直接体験はできないけれども、ある子どもの体験を通じた背後にあることを共有するというような共感も、一つはあっていいのかな。それでアタッチメントを解釈する。

もう一つコンパクトなことですけども、ものすごく個人差があると思うんですね。私が一番重要だと思うのは、それがきっかけに過ぎない

こともあるし、逆にその場では何の変化もないこともあるかもしれないが、もしかすると後々、何らかの体験をしたときに、それがデューイの言う経験の統合だと思うんですが、思い出して、あの時のこれはこういう意味があったのかって、思ってもらうための素材にはなるかなと思うんですね。ですから人っていうのはその場で変化が見て取れる場合と、全然分かんないという場合があって当然で、要はどんなチャンスでか、それを思い起こすような場面に遭遇するといいなという感じですので、働きかけのポイントになるといえば、逃さず質問するとか、よく聴いて、こうじゃないかなという質問をちょっとしてみるとかですね。そういうことが工夫といえば工夫かなと思います。よく耳をそばだててないと聞き逃すので、ちょっとしたため息だったり叫び声だったりすることもあるんですけども。あとは体をリラックスさせるような、ちょっと肩に力が入ってるよ、みたいな語りかけとか、そういうようなものも含めて割と個別ですね。それはコツというのかなんというのか。それはAさん、Bさん、Cさん、係員がいっぱいいますから、全然対応が違うんですけども、こうしなきゃいけないというのはないと思うので、全身全霊その場に自分の感性を傾けるみたいな、そんな感じでやっているので、お答えになるかどうか。アタッチメントのほうはそういうことで解決できるかなと思います。

磯部：ありがとうございます。いまその、関わる時間的な継続性の話がありましたけど、ほんの5分10分でみんなすごく印象的な出会いもあったり、その動物をすごく慈しんで育てている大人の姿を見て自分もそうしてみようという。逆にずっと飼ってても、その関わり方がちょっと虐待的であれば、こんなふう生き物は育つんだという逆の効果もあるんじゃないか。むしろそっちの方を心配するようなニュースとかも多いので。

並木：そうですね。関わる時間というよりは、その生き物を取り巻く人たちのスタンスというのが、行動や言動の中に必ず表れるものなので、それは気を付けていったほうが、とくに教育の場ではですね、気を付けていった方がいいかなと思います。ただ見通しが立たないんだったら飼わない

ほうがいいというのはある意味正論かなと思います。無理やり作業としてやって何が育つんだろうという、ちょっと危機感がありますよね。

モルモットにしても、だいたい5、60人のお子さんが一度に出会うわけですけども、その時に登場するモルモットはだいたい10頭とか15頭なんです。100頭近いモルモットをつねに飼育していて、その健康な100頭のモルモットを、この時期はこのお子さんととか、全部考えながらやるくらい、ふれあいの場を作るといのは神経もいるし、生き物によって生まれるものが効果的に多い代わりに、それを支える人がいるということもこの場で言っかないとな。かわいいですけども、その100頭分のモルモットの健康管理というのがあって初めてできるということ、陰に隠れた努力ということはずいぶん知っておいていただければと思います。付け足しですみませんけれども。

質問者5：うちも市内の保育園でヤギを飼ってるんですけど、もともと保育園でヤギを飼うというのではなくて、学童さんが、一軒家がありまして、そちらのほうでヤギを飼ってたんですけど、やはり地域の方からすごい鳴き声がうるさいとか苦情等がありまして、いろいろ副園長とも協議をして決めて、飼育小屋を業者に作っていただいて飼い始めて2年になるんですけど、きょうの先生のお話を聞いて、どれだけ私たちがヤギのことを学んでヤギの飼育に取り組んだのかなということを、ほんとに反省することばかりなんですけれど。

2年間記録をつけてきた中で、今年いろいろまとめてその話をしているところなんですけれど。その中で子どもたちがヤギを通して、いろいろ優しさとか思いやりというような面で、いろいろな生き物がいるという体験をしてきてるんですけど。やはり関心がある子とない子の差が出てきたりとか、どんどん最初は興味があったことが薄れてきて砂を投げたり石を投げたりという行為も見られたりとか、それに対してヤギがツノで突いたりとかいうこともあって、ヤギのツノ切りをしたりとかしてるところなんですけれど。

お話の中で動物の立場で考えてきたときに、ヤギがツノを切られるということに対して、職員の

中とか保護者の中、子どもたちの中にも、すごく抵抗というか悲しみを持って子ども出てきたりとか。そういった2年間のいろいろな関わりの中で、それぞれの年齢とか生活経験によって一様ではないということが出ていて、そこに関わる保育者とか、保護者がどうかかわるかで、子どもたちもいろいろ感じる感じが違うのかなというのは私たちも体験していることなんですけれど。

やはり一番保育園の中で子どもたちを見てたりするのは保育者なんですけれど、保育者の中でも動物嫌いの職員がいたりとか経験をしてない職員もいたりして、同じような気持ちでなかなか動物と子どもが関わってくることに働きかけができなということが、いま一番保育園が抱えている今後の課題かなということなんですけれど。

もう2年経ってきてあらたにいろんなことを考えるようになって、職員ももうちょっといろいろ勉強していく中で何から取り組んでいけばいいか、アドバイスしていただけることがあったら教えていただければと思っているところです。ヤギの飼育に関しては獣医さんにいろいろご相談をしたりとか情報提供者とかも・・・なので、畜産関係の方とかとも情報交換をしたりとかはしてるんですけど。・・・ちょっと感想みたいになってしまいました。

並木：保育士さんは、子どもさんは好きですか。子どもさんが好きなら全然問題なくて、ヤギ嫌いというのは言っても仕方ないと思うので、お子さんの言動に興味があるのであれば、その・・・をしてヤギを知る。その子にとってヤギは何なのという形でなら、ヤギという生き物を受け入れられるかなという気がするのです。どれだけ個別のヤギとの関わりがこんなにバリエーションがあるねという話が、盛り上がるほうがいいんじゃないのかな。好きな人は、ヤギの世話とかヤギの面倒を見る時に気を付けるとかということでしょうがないかな。時には演技をしてね、ちょっと苦手でも子どもの手前ということが、演技することがあるのも保育士だとあるかなと思いますけれども。無理やり好きになれとか、そういうことはなくていいんじゃないのかな。子どもをもっともっと好きになるために、子どもの目から見たヤギとの

世界、それを気づくとか。そんな感じを続けていくのがいいかなって思います。1：33：25

質問者6：南九州大学健康栄養学部で食品学を担当している竹の之山と申します。私自身も農学部卒で動物が好きだったり動物を飼ったり、自分のまわりでいつも動物がいるなということ・・・。

まず一つ感想を言わせていただきたいのが、子どもの時期、いわゆる幼児期だ、小学校低学年とか、時期によってやっぱり話しかけ問いかけ方が違うんだなということ、やっぱりそうだったところでした。なぜかという作り話のような話なんです、今朝出てくるときに、雀ではなくちょっと大きいヒヨドリみたいなものひなが、駐車場に2羽落ちてて、それがチャーチャー親も鳴いてたんですね。なんでだろうなと思ながら段ボールにちょっと置いてきたんですけども、帰りどうなってるかちょっと分からないんですけども。うちは3人子どもがいて、一番下の幼稚園生は、「見たい、見たい、見たい」と言って、上の1年生は、どうなってるのか、4年生のお姉ちゃんはどうしたらいいのかっていうふう聞いてきたんですね。3人娘がいるんだけど、それぐらい一緒くたの教育ではだめなんだなあと思ったことでした。・・・幼稚園の場合、小学校の場合、対応が違うので、どこにでも対応できるようになってもらいたいなあ。きょうの話をうちの学生にも伝えたいと思ったところでした。

磯部：ありがとうございます。最後に先生からメッセージがありますでしょうか。

並木：メッセージというか、お忙しいこの土曜日のお時間、わざわざありがとうございます。そして先生方、こんなチャンスを作っていただいてありがとうございます。学生さんもほんとにありがとうございます。

最後に何かと言われますと、ものすごくみなさんまじめに子どもの将来とか、目の前にある問題に向き合っているんだなあということを感じます。私は4月から学生の教育の場に行ったわけですが、きょうの遠藤先生の言葉を借りるとすると、距離感ということに関しては非常に危機を感じる人が多いです。つまり一人ひとりが背負ってくるものの大きさと比例する

形で動物に逃げるような、動物との愛着関係でのみ生きていけるというくらいに辛さを訴える学生も多いんですね。これはそれでもって救われるという面もあるかもしれないけれども、本当に動物と人間が、野生動物も含めてですが、共存していく。それは人間の世界に取り込まれてしまったペットも含めて、共存していくというときに、かなり私は危機なんだと思うので、本来あるべき姿が何かというのを私も模索中ですが、何か目指す関係性について深く考える時間というものが、これから生じれば良いなというふうに思っています。

ありがとうございました。

磯部：ありがとうございます。みなさん、いかがだったでしょうか。きょうは動物と子どもの関係をいかにつくっていくかという、は入り口だったんですけども、よくよく物言わぬ動物の立場にたって、とかそんな話を聞いていくとだんだん動物と子どもが重なって行って、結局は自分と自分以外の他者、その相手の立場、視点からこのことは見えるのかとか、そのつながりをどう作っていくのかという、そういった課題というものを時間を取って考えてみたいかという、そういう誘いを受けたなあという感じがします。

最後にもう一度、並木先生に盛大な拍手をいただいて終わりにしたいと思います。

*本学で開催された並木先生の講演録を掲載したが、校正の責任の一切は、磯部、遠藤にあることを付記しておく。